

平成20年度「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業

モデル事業名	地域資源を活かした持続可能なコミュニティ創造事業(通称:ゆいむすび事業)
対象地域	佐賀県三養基郡基山町宮浦地区
活動概要	<p>基山町宮浦地区は、基山町内でもっとも世帯数(213世帯)が少ない中山間地区で、農林業従事者の高齢化や担い手不足により耕作放棄地(遊休農地)や孟宗竹による山地の荒廃が進み、数年で限界集落となる可能性の高い地区。2003年春、このような状況に危機感をもったこの地区の住民が主体となってボランティアグループを結成し、孟宗竹で荒廃した里山の伐採と自然公園づくり活動を開始した。2005年6月にNPO法人化して活動を本格化させた。</p> <p>これまでに約4haの里山の孟宗竹を伐採し、桜・つつじ・紅葉・クヌギなどを植樹するとともに、地元幼稚園の遊び場の提供、担い手のいない果樹農家と契約し果樹オーナー制度を企画運営、休耕田の棚田の活用(合鴨農法による酒米(山田錦)を収穫し地元の造り酒屋でオリジナルブランド酒を企画しその販売収益の10%を環境保全協力金として造り酒屋から寄付)や様々なイベント等の活動を展開してきた。</p> <p>私たちは、住民の生活者視点で「新しい公共」を自主自立の精神で実現することを基本として取り組んでいる。しかし、これまでの5年間の活動を通して様々な課題が浮き彫りになってきた。</p> <p>課題1: 休耕田の利活用における地権者の理解と協力          課題2: 地域資源(人・モノ・金・情報・技・歴史・地勢)の再発見と活用          課題3: 環境負荷及び経済負担の少ない活動拠点整備          課題4: 持続可能なコミュニティのための経済活動の創出</p> <p>今回のモデル事業で達成・実現したいことは、単独のNPO法人の活動ではなかなか解決が困難な上記の課題について、「新たな公」=「新たな結い」と定義し、基山町内外のNPO法人やまちづくり団体等と連携し、新しい共同作業や相互扶助を実現させ、「持続可能な中山間地域の新しいコミュニティ・モデルの創出」に取り組みたいと考えている。</p> <p>(※「ゆいむすび」の「ゆい(結い)」は、古来日本の共同作業や相互扶助を意味する言葉。まちづくり活動やNPO活動などは、まさに現代の「結い」。この「結い」を結ぶ(ネットワークする)ことで多様な視点で地域資源を活かし、住民自治の新しいカタチを実現していこうとする住民活動の「まち活かし運動論」として私たちが提唱するもの。また、私たちのNPO法人名の「きびつと」とは、結ぶという意味の方言から命名した。)</p>
今年度の主な取組	<p>① 遊休農地や荒廃した山林の状況と当該地権者が抱える問題について、実態調査、アクション・ラーニング及びワークショップ等からカルテを整備し、潜在的な問題の顕在化を図り、中山間地区の農地の有効活用についてのビジョンとアクション・プランづくりを行い「課題: 休耕田の利活用による地権者の理解と協力」の解決に向けて取り組む。</p> <p>② 対象地域のみならず基山町内外の住民、NPO関係者並びに日頃から活動に協力を受けている県や市町村関係者と7つのキーワード(人・モノ・金・情報・技・歴史・地勢)による地域資源再発見ワークショップを実施し、「衣」・「食」・「住」・「学」・「遊」の5つのキーワードでその活用についてアイデアを整理し、それぞれのアイデアを試す「このゆびとまれプロジェクト」を実施し、活用案の問題点整理と具体化する上での課題整理を行い「課題: 地域資源の再発見と活用」の解決に向けて取り組む。</p> <p>③ 対象地域にある建築資源(竹・杉・桧などや遊休民家など)を活かした活動拠点づくりを行うためのプロセス設計、積算、実施に向けての人材確保の方法及び抵触する関係法令等の対応についてワークショップを実施するとともに、その実現に向けて環境負荷及び経済負担の少ない資金調達と維持管理方法についてアクション・プランづくりを行い「課題: 環境負荷及び経済負担の少ない活動拠点整備」の解決に向けて取り組む。</p> <p>④ まとめられたアクション・プランやアイデアから持続可能なコミュニティのための経済活動として可能性の高いプランを検討し、社会実験を実施し、その問題点や課題整理を行い「課題: 持続可能なコミュニティのための経済活動の創出」の解決に向けて取り組む。</p>

活動結果	<p>今年度は、地域コミュニティが抱える課題を深く分析するとともに、社会実験プランづくりに重点を置いて取り組んだ結果、コミュニティ創生に有効な手段の検討を行った。</p> <p>「遊休農地の利活用」については、高齢化した農業従事者が所有する遊休農地で他者への活用が困難なものへの対応が課題であるが、心情的な要因が大きく影響するものについては、「根気強い対話継続」が必要である。また、孟宗竹の侵食対策や水路の大規模な補修対策については、人手や費用の観点から、自治体との連携を検討する必要性もある。</p> <p>「地域資源再発見と活用プランづくり」については、7つの視点(人・モノ・金・情報・技・歴史・地勢)を用いるワークショップによる視点の広がり、この視点を活かした活動が有効であると考えられる。</p> <p>孟宗竹で浸食された里山の「環境整備」とその孟宗竹を活かす「地域資源づくり」のアイデアである竹の茶室づくりを通じて、「物語性」を活かすことが地域資源を活用するうえで有効であると考えられる。</p> <p>また、プロジェクトチーム「花を咲かせ隊」を結成し、活動したことを通じて、参加者の意識醸成や参加しやすい環境づくりの重要性を確認することとなった。</p> <p>「地域コミュニティの要である自治会活動」については、地域における過去の経緯等の様々な要因により、相互扶助や共同作業といった本来の活動が必ずしもうまくいっていないことが判明したことから、住民一体となった活動となるように、シンポジウムや対話集会を重ね、地域住民が住民自治について考える機会を継続して作ることの必要性を痛感した。</p> <p>全体の活動を通じての結論として、活動を持続させるための鍵は、「ひとづくり」であり、高齢者が取り組むことができ、かつ、若い世代が魅力と感じる「コミュニティ・ビジネスの創出」であると強く思う。</p>
当初予想していなかった効果	<p>地域資源を創出するうえでは、単に施設を作るだけでは物語性はできるものではなく、地域の人々が参加して夢を語りながら、例えば、施設を作るにしても誰がどんな夢を描いて取り組んだのか、「物語を語れるものづくり」の重要性を認識し、「循環するくらしが見える」ということも持続可能なコミュニティ創生に欠かせないキーワードである。</p> <p>遊休農地の利活用について、協力してもらった地権者と話し合ううちに、実際に活動をやってみようという機運がもりあがり、当初、予定していなかった畑での野菜づくりや休耕田での菜の花プロジェクトをスタートさせた。夢を語ることで、地権者とビジョンの共有ができ、意気投合したことが要因と考えられる。</p> <p>現状ばかりに視点をおいては、問題の認識や原因の究明が不十分であると感じるため、時間軸を描いていつごろからどうなったかを常に意識することと、地域コミュニティの改善のためには、ひとづくりの視点から将来ビジョンを描くことが必要である。</p> <p>魅力ある里山集落の再生のため、人と人、心と心をきびって(結んで)いきたい。</p>
実施状況(写真)	<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">【写真】遊休農地の状況と地域資源の再発見ウォーキング</p>
応募団体名	特定非営利活動法人 きびっとの杜
リンク	<a href="http://kibit.kiyamatown.com/">http://kibit.kiyamatown.com/</a>
部局/担当者名	理事長 成富 由久 事務局 近松 和博
連絡先	0942-92-2073
推薦市町村名	佐賀県基山町